

久米島の風葬墓人骨

土肥 直美

はじめに

沖縄の風葬墓については、墓の形態や厨子甕の形態、銘書の分析などを中心にこれまでも多くの調査・研究がなされている（名嘉真，1978：上江洲，1980，1989：長沢，1989，etc.）。しかしながら、墓の主人公である被葬者自身に焦点を当てて調査した例は少ない。人骨は聞き方によっては非常に多くの情報を提供してくれるものである。今回、久米島総合調査の中で久米島の風葬墓を訪ねる機会が与えられたので、不十分ではあるが、人骨の側から見た墓について少し紹介してみたい。

久米島の代表的な風葬墓としてはヤジャータマ、ヤッチノガマといった大規模なものが知られている。また、島尻地区の石墓や比屋定および北原地区の壁龕墓も有名である。日程の関係で、実際に人骨調査が出来たのは北原地区の風葬墓だけであるが、見たところ、いずれの墓においても人骨の風化は急速に進行しているように思われた。これらの墓については今後総合的な調査が行われることを望みたい。

北原風葬墓の調査

今回我々が調査した地点には6基の墓が認められた。墓は久米島空港に隣接するくるま海老養殖場に面した崖の中腹（ナカベーヤ崖葬墓地帯）に造られており、眼下には広々とした海原が一望できる。また、北東の方角には具志川城の遠景が望まれる。墓の形態は、ほとんど自然の岩陰を利用し前面を石積みで囲ったと思われるもの3基（A群）と、崖壁を矩形に彫り込んで前面に石を積んだもの3基（B群）の2群に分けられる（写真）。しかし、両群とも崖の中腹に造られているという立地条件からすれば、名嘉真（1978）の壁龕墓に分類されるものであろう。また、現在ははっきりしないものの墓道らしきものが認められ、それぞれの群は一つの墓道を共有していたようである。

調査の便宜上、A群を1号墓～3号墓、B群を4号墓～6号墓とした。日程の関係で、人骨の調査が出来たのはこのうちの1号墓だけである。6基の墓は現在ではすべて無縁になっており、被葬者像などの詳細は不明である。

1. A群の墓

墓の広さは、最も規模の大きかったものでおよそ幅5m×奥行き2.5m×高さ1.5m位である。内部にはボージャーを主体とする厨子甕がぎっしりと納められており、人骨の保存

状態は比較的良好であった。

1) 1号墓

1号墓には37個のボージャー厨子を確認することが出来たが、破損した甕もあるので、全体としてはおそらく39個程度が納められているものと思われる。6基の墓のうち、唯一この墓にだけは「具志川城主の乳母だった人が葬られている」という被葬者についての伝承らしきものが残されている。しかしながら、もちろんこの墓には複数の人が葬られているので、乳母個人の墓ではない。また、この乳母に連なる一族の墓であったとしても、厨子甕から見た年代観とはかなりの開きがあるようである。では、この墓に葬られている人たちは一体どのような人たちだったのだろうか？

〔人骨の状況〕

人骨は体部骨を奥に入れ、頭蓋骨をその上に載せるようにして厨子甕の中に納められている。一つの甕に1体だけが納められたもの、2体が納められたもの、3体が納められたもの、4体が納められたものがあり、一見ランダムに納められているように見える。しかしながら、人骨をさらに詳細に調査したところ、これらにはかなりの規則性があるように見受けられた。すなわち、単体で納骨されている場合には特に性別は決まっていなかったが、2体の場合、女性と子どもの組み合わせ一例のほかは、ほとんどが成人男女の組み合わせであった。また、3体以上の場合は成人男女に子どもや若年の個体が加わっていた。全ての甕について詳細な調査を行ったわけではないので、もちろん例外はあるかも知れないが、実際に確認できたものについては上記のパターンが多かった。

〔被葬者の構成〕

次に、この墓に葬られている人たちについて、もう少し詳しく見てみることにする。まず、何人くらいの人たちがこの墓に葬られているのかを知る必要がある。そこで、被葬者の数を推定するために、甕の中に納められている頭蓋骨の数を調査した。一つの甕には1～4体分が納められていたが、破損がひどく、識別が困難なものについては1体以上あるいは2体以上のように

表1 1号墓の被葬者数

甕1個当たりの頭骨数	甕の数	個体数
1体分	6	6体
1体分以上	7	7体以上
2体分	11	22体
2体分以上	4	8体以上
3体分	7	21体
3体分以上	1	3体以上
4体分	1	4体
計	37	71体以上

記録した。その結果、表1に示すように、少なくとも71体という被葬者数が得られた。

71人というかなりの人数のように思える。しかし、実際にはこれらの人たちは同時期に亡くなったわけではないので、集団の規模はそれ程大きなものではない。當眞嗣一氏に

よれば甕の年代は18世紀を主体としているということであるので、この墓の使用された期間を100～150年と見積もると、およそ4～6世代の人たちが葬られていることになる。6世代と仮定して単純に計算すると1世代当たりの人数は11～12人、4世代と仮定しても17人程度である。

〔被葬者の形質〕

人骨の調査は今回だけでは十分に行うことが出来なかったので、形質の詳細についてはさらに調査を行った上で別の機会に報告することにした。現時点までの観察ではかなりの形質的変異が認められ、頭型は長頭から短頭まで、顔面の特徴も非常に面長なものから丸顔のものまで存在し、多様な印象を受ける。家族関係を反映する遺伝性の強い形質などは、今のところ見出していない。しかし、四肢骨には骨折の治癒痕の認められるものがあるなど、当時の人々の生活を示していて興味深かった。

以上のように、1号墓に葬られている人たちはそれ程大きな集団ではないが、形質的にはさまざまな特徴を持った人たちのようである。また、骨折の状況などから考えると、かなり厳しい労働を行っていたのではないだろうか。それにしても、大変几帳面な埋葬習俗を持った人たちである。

2) 2号墓と3号墓

1号墓から東側に少し離れたところに2号墓と3号墓が並んで位置している。規模は1号墓に比べると小さく、幅約2.5m、奥行き約2m、高さ約1.8m程度である。1号墓と同様にほとんど自然に出来た岩陰を利用し、部分的に手が加えられたものと思われる。2号墓には35個、3号墓には16個の厨子甕が納められていた。甕の形態は1号墓と同様にボージャーが主体である。

3) その他

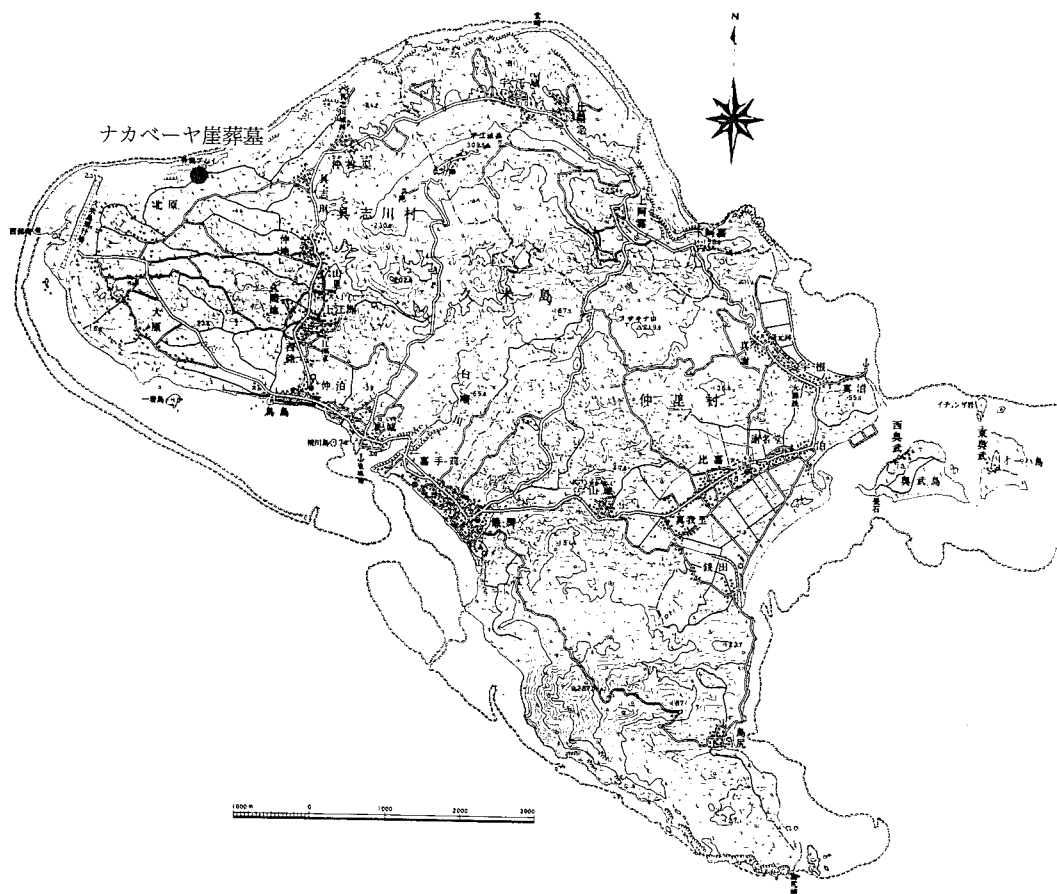
このほか、1号墓と2号墓の間の小さな岩の窪みにボージャー厨子が1個ひっそりと置かれており、これには成年と熟年の女性の骨が納められていた(写真)。二人の女性は墓に入れてもらえなかったのだろうか、民俗学的に興味深い事例だと思われる。

2. B群の墓

B群の墓の規模はA群のものとそれ程変わらない。しかし、墓室内の状況はA群のそれとはかなり違っていた。例えば5号墓の墓室中央部には石を並べた仕切りが設けられており、両方の壁際のほぼ対称な位置に、一段高く石の死床のようなものが造られている。そして、それぞれの区画には5～6個ずつの厨子甕が置かれていた。また、4号墓の墓室左手奥には木棺あるいは木厨子の一部と思われる木材片が折り重なるように散在していて、その間には人骨が見える。表面から観察したところでは、人骨の各部分は解剖学的な位置

関係を正確に保ってはいない。名嘉真宜勝氏によれば、この木片は2次葬のための木厨子であった可能性が強いということである。しかし、棺が崩壊していく過程で人骨の位置関係が乱れたということは十分に考えられることであり、この墓室内で一次葬が行われた可能性も捨てきれないのではないかと思う。

いずれにしても、A群の墓室内がほとんど厨子甕で満たされていて一次葬の痕跡が認められないのに対して、B群の方には明らかに一次葬のためのスペースあるいは痕跡らしきものが存在している点で2群の状況は異なっている。



久米島位置図

3. 人骨から見た北原地区の風葬墓

日程の関係で十分な調査が出来なかったのは残念であるが、それでも、特に葬・墓制に関連するいくつかの情報を得ることが出来たのは収穫であった。

まず、1号墓については、一つの甕に成人男女がペアで納骨されているパターンが最も多かった。この男女の関係が夫婦であるか、兄妹（姉弟）であるか、親子であるか、あるいは他人であるかは大きな問題である。沖縄各地の墓を調査していて、ほとんど常識のように考えられていることが実は良く分かっていないということが時々ある。夫婦の骨が同じ甕に納骨されるようになった時期もその例である。もちろんこの男女の関係については今後科学的に検証されるべきである。しかし、一般に夫婦は同じ甕に入れると言われていたことから考えると、この男女の関係は夫婦と考えて大過ないのではないだろうか。1号墓の例は沖縄における葬・墓制を解明するための好事例になるものと思われる。

ところで、子供の骨の扱いに関しても曖昧な点が多い。一般的に子供は本墓には入れないと言われている。確かに風葬墓で子供の骨を見ることは少ない。しかし、実際に人骨の調査してみると、小児あるいは幼児、希には新生児と思われる骨を見かけることもある。1号墓では、3体以上が一つの甕に納められている場合、成人男女の組み合わせに子どもや若年が加わるパターンがほとんどであった。子供は仮墓に入れておいて両親が死んだ時に一緒に本墓に入れるということを良く耳にする。1号墓の例も、幼くして死亡した子どもを両親と一緒に納骨したののだろうか。また、歯牙の萌出状態から推定される子どもの年齢がほとんど5～7才に集中していた点も興味深い。

次に、墓の所有形態について人骨の側からの情報を整理してみたい。1号墓の被葬者数は少なくとも71人であった。そこで、単純に計算すると、1号墓に葬られている集団の規模は1世代当たり11～17人程度ということになる。しかし、この数字には子供が含まれているので、大人の数はもう少し少なかったはずで、せいぜい5～6組の同世代の夫婦が葬られているということになってしまう。

長沢（1989）が久米島島尻地方で行った墓の調査によれば、18世紀の島尻地方では墓の所有主体は集落であり、いわゆる村墓が主流であったという。したがって、この時期の久米島では村墓が一般的であったと思われる。1号墓が村墓だったとすると5～6組の夫婦という被葬者数は少な過ぎるように思われるが、A・B各群あるいは両群の墓を一つの集落が利用したということも考えられる。また、集団の規模から考えると、島尻の石墓と同様に模合墓への移行過程を示している可能性もある。その場合、それぞれの墓の使用された年代が問題である。最近では、人骨の遺伝学的調査によって、被葬者の親族構造の推定が試みられるようになってきている。しかし、これらを確かめるためには、考古学・民俗学・人類学の総合的な調査が必要である。これらは今後の課題としたい。今回の例は葬・墓制に関する具体的な情報を多く提供している点で貴重な事例と思われる。

おわりに

時間の関係で今回は人骨調査をすることが出来なかったが、ヤジャーガマやヤッチノガマにも膨大な数の人骨が残されており、葬・墓制に関する計り知れない情報が眠っている。しかし、いずれの墓も人骨の状態はあまり良いとは言えない。風化がかなり進んでおり、このままでは久米島の貴重な文化遺産が失われる可能性が強い。近い将来における総合的な調査を心から願っている。

謝辞

小稿を終えるに当たり、久米島の風葬墓調査の機会を与えた下さった沖縄県立博物館の皆さまに謝意を表します。

特に、調査に同行していただき、ご指導とご教示をいただいた當眞嗣一氏と久手堅稔氏、足場の悪い調査地で特別有能な助手を努めて下さった上に、本稿中の挿図まで引き受けて下さった比嘉元子氏に心から感謝いたします。今回の風葬墓調査はこれらの方々のご助力なしには実現しなかったものである。

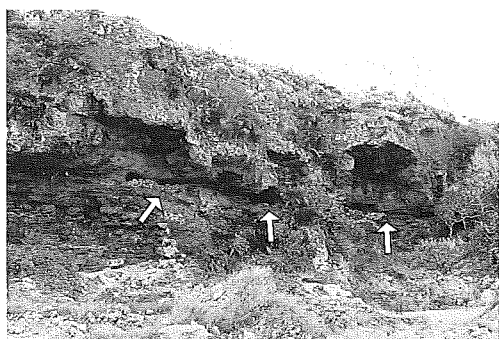
また、墓の所見について貴重なコメントをいただいた読谷村立歴史民俗資料館の名嘉真宜勝氏、調査へのご助力をいただいた久米島の皆さまに感謝いたします。

参考文献

- 伊波 普猷, 1973, 南島古代の葬制。「おなり神の島」1巻, 平凡社。
- 名嘉真宜勝, 1978, 南島の墓制—形態と外観からその特殊性をみる。「えとのす」, 第10号, 143-147。
- 長沢 利明, 1989, 墓と編年—沖縄久米島島尻の事例から—。季刊人類学20(1), 156-215。
- 上江洲 均, 1989, 厨子甕について。沖縄県地域史協議会編, シンポジウム「南島の墓」沖縄の葬制・墓制。
- 1980, 沖縄の厨子甕。「国分直一博士古稀記念論集——日本民族文化とその周辺——(歴史・民族編)」新日本教育図書出版。



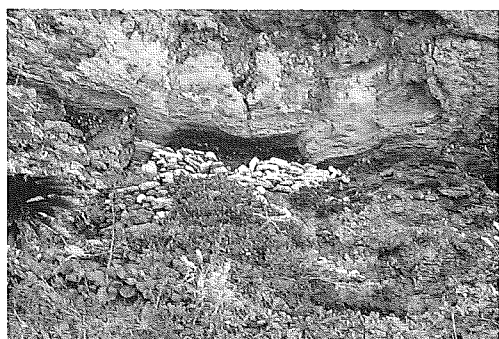
1. A群風葬墓



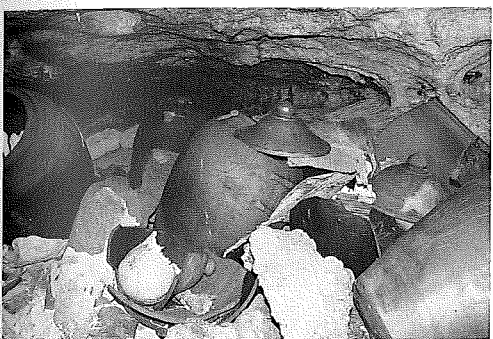
2. B群風葬墓



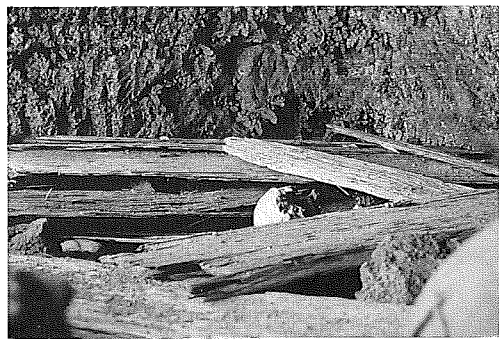
3. 1号墓



4. 5号墓



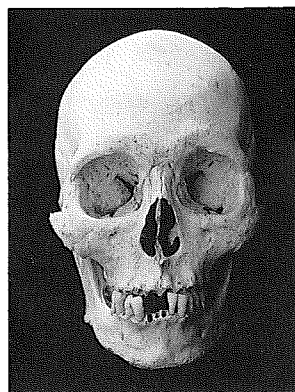
5. 1号墓内部



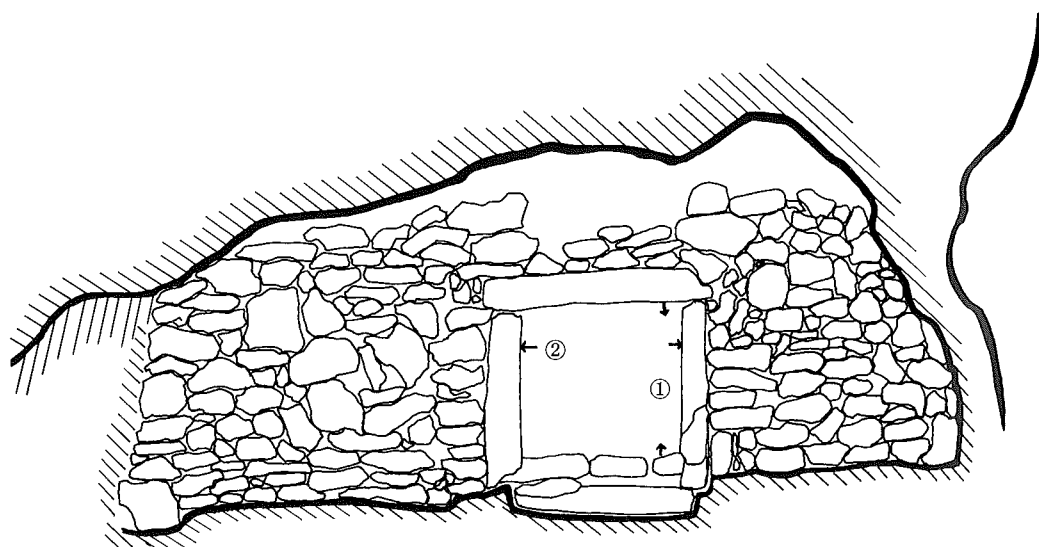
6. 4号墓内部



7. 女性2人が葬られていた墓室外の厨子甕

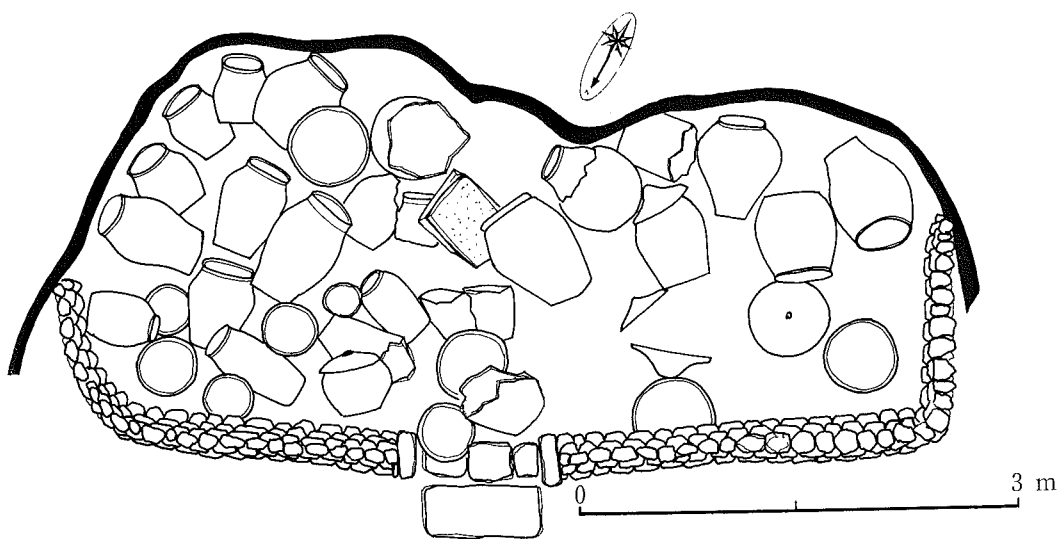


8. 1号墓人骨



① 113cm
② 90cm

ナカベーヤ崖葬墓（立面見取図）



ナカベーヤ崖葬墓平面図

図 2